

健康文化

健康文化

金子 昌生

人が生まれて死んでいくことは自然である。人類を他の動物と同じく生物として考えた時、生まれて成長し、成熟、やがて老化して死を迎える繰り返しながら、文明も発達しなかったであろうし、文化を築くことも出来なかったであろう。

原始人が足で歩くようになり、手を使い、脳が発達してきた。火を使うことを発見し、食生活に変化をきたし、明りを得て夜も活かし得る様になった。単なる発声から、言葉により意志の疎通が出来る様になる。文字の発明により、言葉の伝達、記録が可能となって知識の蓄積が、人類の歴史の始まりである。天然自然の中で生きていくうちに、自然を観察し、自然を理解しながら、自然現象を整理して科学が生まれて来た。物を数えることは数学の始まりであり、物の理、道具の発明など、科学の始まりであろう。その科学の法則を活かしながら、自然への挑戦をして人工的な物質文明を起し、衣食住を充実させ、教育・研究により、更に文明を高度化して来た。

文明と文化とはどう違うのであろうか。文化は人類の遺産であり、英語の **culture** は、元来、語源的には耕作の意から始まって栽培・教養から文化へと進んだ。人類がうまれてから培って来た **know - how** を以心伝心して来たものであり、現代的には **soft - ware** とも言えよう。一方文明は技術的な側面が大きく、英語の **civilization** は、人類がお互いに競って生活を改善して来た文明開化とその普及であり、電気の応用や交通の発達、エネルギー源としての原子力、超電導技術や宇宙開発など、**hard - ware** 的なものである。文明が科学技術的なものであるのに対し、文化は哲学的、芸術的なものであろう。どちらにも共通なことは、創造的 **creative** なものであり、最終的には人類の共有財産である。

本題の健康文化の健康とは何か、健康とは空気や水の如く、その存在を知らない間は、気がつかないことが多い。病気になって初めて健康の有難さが削るのが普通である。日本では、憲法により健康で文化的な生活が保証されている。

病気になって医師に診察してもらおう。病院に行きいろいろな検査を受けたり、入院して治療を受ける。その現場では医療技術の恩恵を蒙る。これは自動車の修理と同じく、こわれた部分の修繕であり、人工臓器や移植となれば、部品の取り換えである。病気を治して健康体にすることが、医療には求められている。集団検診の様に早期発見する場合でも、異常が見つければその治療に専念するのみである。異常が見つからなければ、本人は安心してしまう。特別に健康維持に対して、医療が積極的な働きをすることは少ない。人間ドックと云うのも、人間を船にたとえた為には誤解を生ずる。ドック入りしている時はおとなしく検査を受け、その結果により病気が見つければ、治療を受ける点は集団検診や健康診断と同じかもしれない。しかし、一旦「あなたは大丈夫です」とドックの結果が出ると、船と同じ様に大海原を航海しても、絶対大丈夫と云う過信を生じ、次のドック入りまでは、とにかく無理な生活をしてしまうことが多い様だ。航海中、船長が風雨・大波に耐えて安全第一の航路を願って、目的地に向かっている程には、常に人体について健康を維持管理すると云う考え方は、うすれてしまいがちである。人体の元来持っている許容力と柔軟性により、知らぬ間に救われることが多い。一旦病状が出て SOS を発する時には、手遅れであることが余りにも一般的なことはなげかわしい。

医学を学問として考えると、人体の正常の解剖学から生理・機能を追求し、人体とは何ぞやと哲学的なものとなる。疾病についても病態生理学の追求で、疾病の本態を知ることにより、原因療法を可能にする。精神的な面も加わって、更に幅と深さが増す。西洋医学の分析的な手法は科学の原則であるが、最近注目されて来た東洋医学は、全体を直感的に見て、個々は往の立場をとる。分割と統合の両者を補完して、完全な医学が完成する。日本は元来東洋の一員として、西欧の文明を逸早く身につけたのであるから、東西の橋渡し役として文化交流を果たし、健康医学 Health Science を通じて、人類の幸福と世界平和に貢献すべきであろう。

健康文化を少しでも浮き彫りにしようとして、とりとめもない話となってしまったが、どうも健康文化は「青い鳥」の様なものかも知れない。青い鳥は幸福の代名詞として使われて来たが、健康でありたいと云うことを願うのも幸福そのものであり、人類の構成員個人個人が、すべて平等に *homosa, piens* として、受ける権利を有する医学の恩恵が、健康そのものである。それを追求する人間の努力の賜物が、文化を築きあげる。話が抽象的になり過ぎたが、健康文

化をめざして努力することは、足が地についたものでなくてはならぬ。医療の実践でも、病気の時だけでなく健康の維持・管理に、例えば保健所が健康相談の窓口となり活動するとか、健康に関する相談役として家庭医が身近に存在する様な社会を構成すると共に、病院や大学の役割り分担を明確にして、お互いに連繋プレイをしていくべきであろう。そうすれば青い鳥の舞う幸福な、健康に満ち充ちた人類が平和に生活している社会が実現し、健康文化の華が咲き誇るであろう。

(浜松医科大学教授放射線医学教室)